

# 追悼 矢野浩三郎教授

— 世にあるも世を去るも —

和田正美\*

いふまでもないことながら全ての物事に始まりと終りがある。そしてこれまた言を俟たないことであるが、その物事の中には人間関係も含まれる。實際、私達は生れてから死ぬまで、どれほど多くの人との間で始まりと終りを経験することだらうか。人間関係における終りは何も死別のことだけでなく、昨日まで親しくしてゐた人と今日はすっかり疎遠になつてゐるといふやうなものもその終り方といふべきであるが、この場合には再び親しくなる可能性がなきにしもあらずなのだから、やはり死別こそ最もそれらしい終りであらう。

事柄の順序として始めに眼を向けると、平成四年四月の明星大學青梅校の開學と同時にその日本文化學部言語文化學科の教員になつた私は、間もなく、何年かたつと矢野浩三郎といふ教員が赴任する豫定だと聞いた。彼は狹義の學者ではなく、翻譯家なのだといふ話だつた。そこで私はこの翻譯家といふ減多にない呼稱を手掛りに、想像をふくらませて、

遠からず出會ふであらう矢野先生の人物像を思ひ描いた。彼は氣むづかしく高踏的で、他人を容易に受けつけない人なのか。それとも周圍に細かく氣を配りながら表向きは磊落で、いはば清濁併せ呑むやうな雰圍氣の人なのか。

いざ數年後に矢野浩三郎先生が姿を現した時、私はこの兩極端の想像がいづれも正しくないことを悟つた。矢野先生は溫和で、氣さくで、にこやかで、當時の先生の年齢を無視して言へば好々爺然とした好人物だつた。翻譯家といふ言葉から世塵を超越した人物を想像してゐたことは私の過誤だつた。

私はこの好人物にすぐ打ち解けたが、やがて、矢野先生はたしかに學者肌ではなく、職人氣質の人だと思ふやうになつた。先生はふとしたことで並外れて頑固な面を覗かせることがあつたが、私はそれを先生の職人氣質に結びつけて解釋した。職人は頑固でなければ勤まらない。思ふに翻譯は世俗的に報はれるところが少ないにもかかはらず、高度の技術が必要な、神經をすり減らす仕事であらう。さういふ仕事に従事してゐれば、常人より頑固にならざるを得ないといふものである。

さうかうしてゐる内に矢野先生と私の間には或る話題が生じた。それは文藝批評家の中村光夫をめぐる話題である。私は一頃まで中村の批評文の愛讀者だつたし、今でも時々自分の論文の中で中村に言及してゐるが、生前の中村には何度かめぐり合ひながら話し掛ける機會がつかめず、たうとう面識を得ることなく終つた。一方、矢野先生は明治大學のフランス文學科と文藝科で中村光夫先生こと木庭一郎先生の指導を受けたのである。自ら、中村に關する矢野先生の思ひ出は豊富であり、私はよくせがんでそれを聞かせてもらつた。

そんな或る日、矢野先生が私に一冊の本を呈示して、「これを差し上

げませう」と言つた。『世にあるも世を去るも』と題されたこの本の副題は「中村光夫先生追悼文集」であり、これでわかる通り、この本は中村の死後、彼の教へ子達が舊師を偲んで書いた文を集めたものである。私は今、これを手にしながら、死後にかういふ文集を編んでもらへた中村は幸福な人だと感じてゐるが、このことに関連させて言へば、矢野先生を追悼する文を発表するのが私一人ではないことを衷心より願つてゐる。何處か私の知らないところでそれは幾つか書かれ、発表されたのだと信じることにしたい。

この本には矢野先生も「額の十字架」といふ題の文を寄せてゐるが、その中に次の一節がある。

ダンディズムとは、おのれを厳しく律することでもあるだろう。他人に厳しかった以上に、おそらく先生はご自身に厳しさを課されていた。それを貫く生き方こそがダンディズムなのであり、そのためには余人にははかりしれない緊張の持続があつたのではないか。

右の文中のダンディズムは矢野先生の原文ではフランス語風のダンディズムなのであるが、私は拙文の讀者のことを考へて英語式に改めた。地下の矢野先生の寛恕を乞ふ次第である。

矢野浩三郎先生は師の中村光夫先生をこのやうに評したわけであるが、この評言は矢野先生にも當て嵌められさうな氣がする。もつとも「他人に厳しかった」といふ箇所は矢野先生の實際にはそぐはないが、先生が垣間見せることのあつた職人的頑固さはその變形と考へられなくもない。しかしそれは小さいことであり、重要なのはダンディズムの一語である。

私はここまで矢野先生を様々に形容して來たが、それらを總括する言葉がダンディズムである。これ以外には矢野先生の姿をびたりと言ひ當てる言葉を考へ出すことが出来ない。すでに使用した表現をここで繰り返せば、高踏的な様子も磊落な様子も最初は人を魅了するかも知れないが、さほど長續きのするものではないであらう。眞のダンディズムはむしろ、矢野先生のやうな、一見平凡な好人物の中に潜んでゐるのではあるまいか。

引用文の中の、「余人にははかりしれない緊張の持続があつた」といふ箇所を讀み返す時、思ひ出すことがある。或る時、同僚の某氏が笑顔の矢野先生に、「矢野さんはいつもにこにこしてをりますね。昔からさうだつたのかな?」と言つたところ、先生は即座に、少し表情を改めて、「いやあ、いろんな時期がありましたよ」と答へたものである。私はそれを聞いた時、はつとして、「あ、さうか」と思つた。矢野先生のにこやかな姿は生得のものといふより、試煉をくぐり抜けて形成されたものであることがわかつたからである。

さうすると矢野先生のダンディズムは意志の産物だつたことになり、その裏には「緊張の持続」があつたと言へるであらう。眞實は常にそれを支へる努力を必要とするからには、これこそ本物のダンディズムである。矢野先生はさういふことを誰にも感じさせたからこそ、同僚から信頼され、學生から慕はれたのであらうと思はれる。

追悼文集の表題を借りて述べると、矢野浩三郎先生は「世にあるも世を去るも」澁いダンディズムで人心を捉へる。まことに得難い人だつた。私は先生との關係の「終り」に際して、この言葉を先生に捧げたいと思ふのである。